

創世記1章6-31節 「創造の祝福」

1A 形の創造 6-13

1B 大空 6-8

2B 陸海と植物 9-13

2A 有の創造 14-31

1B 光る物 14-19

2B 海と空の生き物 20-23

3B 陸の生き物 24-31

1C 動物 24-25

2C 人 26-27

3C 祝福 28-31

本文

創世記 1 章 6 節からが、今日の学びです。けれども、おさらいをしたいと思います。私たちは神の創造が、形のない地、また虚無の状態であることを見ました。「地は形がなく、何もなかった。」とあります。そして、闇が大いなる水の上にあり、神の霊が水の上を動いておられました。すでに、ここに神の新しい業の希望が見えます。罪の中に暗闇の中にいる人が、神の霊のよって命を得ます。そして光が与えられます。それを世界の創造の中に初めに、その型を見るのです。

そして神は光を造られました。神の創造には、順番がありました。初めに、言葉によって命令を出されます。「光よ。あれ。」であります。次に、それを有るものとして固めておられます。「光ができた」とあります。神は無から有を呼び出される方です。それから、神の評価があります。「神はその光をよしと見られた。」とあります。これは、「トブ」というヘブル語で、神が初めの創造を善なるものと見ておられるということです。そして、区別する働きを行われます。「この光とやみを区別された」とあります。神は区別される方です。形のないものを形あるものにされる方です。贖い、救いにおいても、イスラエルがエジプトにいる時に神は、エジプト人とイスラエル人を区別して後者に救いを置かれました。そして、光を昼に、闇を夜と名づけられます。名づけるによって、神は光と闇をご自分の支配と管理下に置かれます。この働きを後に人に神は与えられます。

そして一日が終わります。夜があり、昼がありました。夜が、ユダヤ人にとって一日の始まりです。

1A 形の創造 6-13

1B 大空 6-8

1:6 ついで神は「大空よ。水の間にあれ。水と水との間に区別があるように。」と仰せられた。1:7 こうして神は、大空を造り、大空の下にある水と、大空の上にある水とを区別された。するとそのよ

うになった。1:8 神は、その大空を天と名づけられた。こうして夕があり、朝があった。第二日。

水が地の上にあるだけのところに、大空を神は造られました。「大空」という言葉は、「引きのばす」という意味があります。「天を造り出し、これを引き延べ、(イザヤ 42:5)」とあるとおりです。そして大空の下には水があり、これは後に海となります。けれども、上にある水もあります。そうですね、雲などの水蒸気が今でも空の上にあります。後に、ノアの日に洪水が起こる時に、「天の水門が開かれた。(7:11)」とあります。したがって、この大空の上の水というのは、今の雲以上の水の集まり、水の層のようなものがあつたのかもしれませんが。かなり、今の私たちの地球環境と異なっていたことでしょう。

そして、これを「空」と名づけておられます。聖書には、天が複数になっていますが、「空」と呼ばれるもの、そして「空中」と呼ばれる天使などの活動する空間があり、そして神の御座のある「天」があります。そして、夕があり、朝がありました。第二日目が終わります。ここで、主が、「これをよしとされた」という評価が出てきません。おそらく、次の三日目に神の行なわれることを意識して、ここではまだ終わっていないという思いを強くしておられたのではないかと思います。

2B 陸海と植物 9-13

1:9 神は「天の下の水は一所に集まれ。かわいた所が現われよ。」と仰せられた。するとそのようになった。1:10 神は、かわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神は見て、それをよしとされた。

第四日目には、大空の下にある水が一つの所に集められます。そして、乾いたところが出て、そこが陸になります。水を海と名づけ、乾いたところを陸と名づけられます。この時は、もっと単純な大陸だったと思います。後にノアの洪水で地殻変動が起こり、またペレツの時代に地が分かれた、とありますので、その時に今のような大陸に分かれたのではないかと思います。そして、ここで神は、「それをよしとされた」と言われています。

1:11 神が、「地は植物、種を生じる草、種類にしたがって、その中に種のある実を結ぶ果樹を地の上に芽生えさせよ。」と仰せられると、そのようになった。1:12 それで、地は植物、おのおのその種類にしたがって種を生じる草、おのおのその種類にしたがって、その中に種のある実を結ぶ木を生じた。神は見て、それをよしとされた。1:13 こうして夕があり、朝があった。第三日。

三日目には、神はもう一つの創造をされています。(同じように六日目に神は二つの創造をされます。)神が陸に植物を造られました。植物というのは、草とか穀物のことです。種を生じる草とは、野菜類のことです。そして、実を結ぶ果樹はそのとおり、果物のことです。そして主は、「種」という手段によって自ら増え、生えていくようにされました。

ここで神が強調されているのは、「おのおのその種類にしたがって」ということです。これが、後に水や空の生き物にも、そして動物にも出てきます。事実、今、種類ごとの生き物で満ちています。もちろん馬と驢馬によって騾馬が生まれたりしますが、大まかな種類は決まっています。このようにして神は、それぞれの種類を区別しておられます。この区別を無くしているのが進化論です。アメーバからより高等な生物に進化していった、と言います。そして人間はアメーバから何十億年もかけて進化したと話します。しかし、私たちの地球に中間種というものはありません。

そして神の区別は、いろいろな秩序の中で見ます。モーセの律法の中では、ぶどう畑に二種類の種を蒔いてはいけない、羊毛と亜麻布の糸を混ぜて織ってはいけないという戒めまであります（申命 22:9,11）。神が区別する神であることを私たちは知ります。ですから、次に動物と人間が区別されています。2章に出てきますがその土台になっているのが男と女の区別です。それを一つにすることを神は、絶対にやってはいけないことだと話しておられます。男が男と寝てはいけないと命じられます。このような秩序の中で、私たちは神の創造の栄光を見ることができます。これを混ぜようとする時、再び創造前の混沌へと戻されてしまうのです。

そして、主はここまで造り、「よしと見られた」と言われています。ご自身の造られたものを喜んでおられ、満足しておられるのです。

2A 有の創造 14-31

こうして、神は形を作ってくださいました。そして神はこれから、その形ある所に有を造りだしていかれます。ちょうど、家の枠組みを建設したけれども、その内装を開始するような感じです。意味あるものを造られます。2節に「何もなかった」とありますが、有るようにしてくださるのです。そのことによって、創造に意味を持たせます。

1B 光る物 14-19

1:14 ついで神は、「光る物は天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のために、役立て。1:15 天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」と仰せられた。するとそのようになった。1:16 それで神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。1:17 神はそれらを天の大空に置き、地上を照らせ、1:18 また昼と夜とをつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神は見て、それをよしとされた。1:19 こうして夕があり、朝があった。第四日。

四日目は、一日目の「光があった」を見ればよいです。五日目は二日目の大空を、そして六日目は三日目の陸を見ると良いです。このように対応しています。四日目は、「光る物」が造られています。しかし、光そのものは一日目に造られました。けれども神は敢えて、日、月、年という時のしるしを生み出すために、光る物を造られました。つまり太陽、月、星です。これらによって、私たちは時のしるしを知ることができます。ユダヤ人たちは、例祭といって、年ごとに祭りを七つ持っています。

した。そして新月の祭りを、毎月の第一日に持ち、安息日を七日毎に持っていました。これらによって、神に礼拝を捧げていました。

私たちは、天体の運行を見て驚きますね。天体の規則正しい運行を発見した自然科学者は、神を信じている者でした。ケプラーしかり、ガリレオしかり、ニュートンもそうでした。詩篇 19 篇 1-2 節にこう書いてあります。「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。(詩篇 19:1-2)」

私たちは時間が与えられ、季節が与えられ、そして年が与えられることによって、その周期の中で私たちは生活のリズムを得ることができています。しかし、それもなくなる時が来ます。それは新しいエルサレムの時です。そこには太陽や月、星がありません。神と小羊の光があるだけです。そこは永遠です。時間を越えた永遠であります。私たちは新しく生まれると、永遠のいのちを得ます。ある意味で私たちは時間の中に生きながら、時間を超えて永遠の中にも生きています。すでにすべてが新しくされた終わりのの中に既に生きています。したがって、私たちは揺るがぬ希望をもって生きることができます。

しかし、光る物をご自身で造られ、これらを見て良しとされました。

2B 海と空の生き物 20-23

1:20 ついで神は、「水は生き物の群れが、群がるようになれ。また鳥は地の上、天の大空を飛べ。」と仰せられた。1:21 それで神は、海の巨獣と、その種類にしたがって、水に群がりうごめくすべての生き物と、その種類にしたがって、翼のあるすべての鳥を創造された。神は見て、それをよしとされた。1:22 神はまた、それらを祝福して仰せられた。「生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。」1:23 こうして、夕があり、朝があった。第五日。

五日目に、二日目に主が造られた大空に、また海に、生き物を造られました。21 節の「創造された」というのは、ヘブル語がバラです。無から有を創造されました。ここでも、植物の時と同じように種類にしたがって造られています。さらに、ここでの祝福は植物と違って、卵によって増え広がるように神が命じられています。ここで聖書の中で初めて、「祝福(バルク)」という言葉が出てきます。主が良しとされるだけでなく、豊かにしてくださる、祝福してくださるのです。

この祝福が発展します、主は人を造られて、祝福されたと六日目に言われます。さらに七日目に、安息日を聖なるものとし、祝福されます。しかし、アダムが罪を犯し、地が呪われたものとなりますが、ノアの時代に神はやり直しを与えられ、ノアの家族や、箱舟に乗っていた動物たちに再び祝福されます。そしてついに、その祝福はとこしえに変わらぬものとして約束してくださいます。そうです、アブラハムに対してです。彼を無条件に祝福し、「すべての民族は彼によって祝福される」としてくださいました。

そしてついに、キリストにあつて神の祝福は実現するのです。「そういうわけで、信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。(ガラテヤ 3:9)」キリストを信じる者は、神が初めに意図された祝福を受けるように召されたのです。私たちの存在が、神の創造の初めの意図を表しているものであります。

そしてもう一つ、お話ししたいことは、神が海に生き物を造られる時に、「海の巨獣」を造られています。この巨獣のヘブル語では、他の箇所「蛇」「竜」と訳されており、レビヤタンと並んで出てきます。例えば、「その日、主は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタン、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。(イザヤ 27:1)」とあります。そうです、私たちはヨブ記で学びました、海にいる第一の獣がレビヤタンであり、海の巨獣であり、竜でありました。なぜここで、主が海の巨獣に言及されているのかは、3章に出てくる蛇のことを意識しておられるからだだと思います。神は海の巨獣を初め良く造られましたが、その中でサタンが入るようにされました。

3B 陸の生き物 24-31

1C 動物 24-25

1:24 ついで神は、「地は、その種類にしたがって、生き物、家畜や、はうもの、その種類にしたがって野の獣を生ぜよ。」と仰せられた。するとそのようになった。1:25 神は、その種類にしたがって野の獣、その種類にしたがって家畜、その種類にしたがって地のすべてのはうものを造られた。神は見て、それをよしとされた。

六日目です。三日目に造られた陸において、神は初めに動物を造られました。そして、次に人を造られます。動物ですが、興味深いことに神は生き物を造られるときに、初めから「家畜」を造られています。すべてが野生だったのではなく、初めから、人が飼うべき動物を造られているのです。そして、「這うもの」ということで別途に神は言及されています。これもまた、私は 3 章の蛇を神は意識しているのではないかと思います。

主は三日目に、二つを、すなわち海と陸の他に、植物を造られましたが、同じように六日目に神は二つを造られます。動物と人です。動物は他の生き物の中では人に最も近い、動物です。似た部分が多いです。そこで多くの者が人間は動物の一種であると言います。いいえ、決定的に違うのだということを次から教えます。

2C 人 26-27

1:26 そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。1:27 神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

神は強調されました。人を造られる時は、「我々の形に」造ると言われます。そして 27 節でも、「ご自分のかたちに」と強調されています。ここで神は「創造された」という言葉を繰り返されています。三度も繰り返しています。これが神の最高傑作だからです。動物と同じように被造物であるにも関わらず、神に似せて造られたのです。こんなすごいことはありません。

どのように「同じかたち」なのかと言いますと、まず神は霊でありますから、顔かたちがあるということではありません。むしろ動物と同じように、外見からしますと猿にも似ているぐらいです。そうではなく、神は霊であるとイエスは言われました。霊的存在だということです。2章で神は、人に息を吹きかけられます。これによって彼は生きたものとなります。したがって、人は、肉体や知覚以外に、霊を宿す存在になりました。だから、造られていることの意味を最もよく知っている存在でした。初めは虚無であったというのとは正反対の、虚しさとは正反対の満ち満ちた存在として生きるように造られたのです。

ここで、「われわれに似せて」と神が言われていることに気をつけてください。私たちはこれを、三位一体の神の現れであることを聖霊の学びシリーズで学びました。神というヘブル語自体が、エロヒムという複数形です。三つの人格のある、ひとりの神です。したがって、神はご自身の創造を、三つの人格の協働作品として行われていることを強調しているのです。このことを考えますと、私たちは驚くのです、イエスがご生まれになり、バプテスマを受けられた時、ひとりの神は三つの人格で現われたということです。「こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった。また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。(マタイ 3:16-17)」

イエスが来られたことは、まさに三位一体の神が罪の中に死んでしまった人々を、再びご自分のかたちに引き戻す働きだったのです。われわれに似せて、われわれのかたちにと言われた方が、永遠の御霊によって、キリストが自身の血を父なる神にささげ、我々を新たに神のかたちに戻してくださいました。そして、神ご自身の中で愛の交わりがありました。父なる神が子を愛され、子は父に服されました。そして聖霊は父から遣わされ、子を証しするために私たちのところに来てくださいました。この交わりの中に私たちを招いてくださいましたのです。神のかたちに造られたというときに、このような神の中にある愛の交わりに招かれているということです。

使徒パウロは言いました。「新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられますますます新しくされ、真の知識に至るのです。そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。(コロサイ 3:10-11)」新しい人が、造り主のかたちに似せて新しくされているのです。原初の神の意図の中に招き入れられているのです。そして、私たちは社会的にいろいろな壁を作っています。民族の壁、経済格差、男女、けれども、原初の目的に戻されることにおい

ては、何も変わることがありません、ハレルヤ！私たちはキリストにあって、一つにされています。

そして、そうした神との親しい交わりの中で、愛の交わりの中で、神に一つになりながら、この方
にあって他の生き物を支配するように命じられています。しかし、後に悪魔によって惑わしを受け、
その支配の力を失うのですが、ダビデはこのように神が人の子らに心を留めておられる、その神
の御思いに圧倒されながら、賛歌を記しました。「あなたの指のわざである天を見、あなたが整え
られた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人
の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。あなたは、人を、神よりいくらか劣る
ものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、
万物を彼の足の下に置かれました。すべて、羊も牛も、また、野の獣も、空の鳥、海の魚、海路を
通うものも。(詩篇 8:3-8)」そうです、人は神の被造物の傑作品であり、栄光と誉れの冠をかぶせ
られました。

3C 祝福 28-31

1:28 神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。
地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」1:29 ついで神は仰せられ
た。「見よ。わたしは、全地の上にあって、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての
木をあなたがたに与えた。それがあなたがたの食物となる。1:30 また、地のすべての獣、空のす
べての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の
草を与える。」すると、そのようになった。

神は改めて、男と女に造られた人に祝福命令を与えられました。まず、「生めよ、ふえよ。」であり
ます。キリスト教は、男女の性行為を汚れたものとみなす傾向にあります。神は祝福する命令と
して与えておられます。ですから、救いも女が子を産むことによって与えられるように神は定めら
れました。アブラハムの子孫から救いが来るようにされ、その契約の印は割礼、すなわち男の子
種だったのです。

次に、「地を従えよ」であります。被造物を治めますが、これも人の罪によって被造物がうめきの
中に入ってしまった。しかし、キリストが来られて贖われた者たちが、キリストと共に地上に戻
ってくる時に、自然界も解放の中に入れられて、元の姿に回復します。私たちは今、この回復され
た神の国で被造物を治めるための備えをしていると言っても過言ではありません。主人が十人の
しもべに十ミナを与えて、それぞれが一ミナもらってそれを使って商売でもうけたかどうか、主人が
たしかめます(ルカ 19 章)。私たちがその中にいるのだということを知る必要があります。

そして次に、食べる物についての規定ですが、当時は植物のみが食べるものでありました。肉
を食べるようになるのは、ノアの時代の洪水の後からです。家畜は、食べるためではなく、いけに
えとして捧げられます。そして動物も植物のみを食べます。地上の神の国では、獅子も草を食べる

ようになることを、イザヤは 11 章で預言しました。ですから、神の国において環境問題はありま
せんでしたし、また動物愛護団体も文句を言わなかったのです。

1:31 そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によか
った。こうして夕があり、朝があった。第六日。

いかがですか、主が全てを造られ、人を造られて、「見よ。それは非常によかった。」とご自身で
感動しておられます。これが、人の生きている意味です。すべては神の栄光のためです。すべて
は、神が成されていることを私たちが、また自然がほめたたえます。天体も、山々も、動物も、木々
もみな、主の御名をほめたたえます。その中で、ご自身が愛してやまない、誉れと冠をかぶせて
くださったのは、我々人間なのです。

このようにすべてが良かったところと、いまがどれだけ違うでしょうか？悪くなったのは、私たちの
罪です。しかし、神は新たに、後にイスラエルになされるように区別することによって救いをもたら
されます。罪によって神の反抗している世から私たちを選び分けられて、ご自分に属する者として
くださいました。神の善と、そうではないものとを区別しながら生きていく者とされました。